

戦後知識人の対アメリカ観：小田実と江藤淳の体験から

## 序論

- 1、問題意識
- 2、研究対象
- 3、研究手法
- 4、先行研究

## 本論

### 1章：小田実

- 1-1、戦争の記憶
- 1-2、アメリカ留学と「南部」体験
- 1-3、帰国後の言論活動：新たな原理の模索
  - 1-3-1、ベトナム反戦運動：「ベ平連」の試み
  - 1-3-2、「護憲」ナショナリズム

### 2章：江藤淳

- 2-1、「戦後」への幻滅
- 2-2、アメリカ留学とプリンストンでの生活
- 2-3、帰国後の言論活動：戦後民主主義への苛立ち
  - 2-3-1、占領政策批判
  - 2-3-2、リアリストの孤独

### 3章：終章

## 序論

### 1、問題意識

アメリカに対してどのようなスタンスを採るかは、戦後日本の知識人にとって常に問題であり続けてきた。敗戦という負い目を背負っていた日本の知識人にとって、アメリカは一つの「思想」として受け取られていた。ある者はアメリカを「自由」と「民主主義」の旗手として評価し、またある者はアメリカを日本の生活様式を破壊し、日本を属国化する主体として嫌悪していた。日本について考えることがそのままアメリカについて考えることに繋がるという状況は戦後一貫して変わっておらず、米軍基地問題や沖縄問題を筆頭に、現在でも「アメリカ」は問題であり続けている。

本研究では、ほぼ同時期にアメリカに留学した小田実と江藤淳の言説を素材として、戦後日本に存在する対照的なアメリカ観の基本形を取り出すことを目標とする。小田は1958年にフルブライト奨学生としてハーバード大学へ、江藤淳はロックフェラー財団奨学生として1962年にプリンストン大学へそれぞれ留学しているが、彼等がアメリカに対して感じたものや、帰国後の言論活動は対照的である。両者の思想の限界とその意義を指摘することは、現代日本に流布している対アメリカ観を反省する上でも有益だろう。最後には、二人の思想を踏まえた上で、「親米」でも「反米」でもなく、いかにしてアメリカを「超克」することができるのかを考えたい。

### 2、研究対象

江藤淳と小田実の著作を用いる。主に60~70年代後の言説を中心に、帰国後の言論活動を加える。この年代に着目する理由は、まず2人のアメリカ体験がこの時期に集中していること、そしてこの時期に「自由と民主主義の旗手」アメリカというイメージが崩れ始め、日本でのアメリカ観が変わり始めるからである。

### 3、研究手法

思想史研究の方法に則り、本人の残した著作から彼等の思想を明らかにし、アメリカを巡る苦悩の後を取り出すことを目指す。

### 4、先行研究

知識人のアメリカ観に関する研究には、上野千鶴子『戦後知識人の北米体験』<sup>i</sup>がまず挙げられる。日本の知識人の内、アメリカに留学した人々を年代別に取り上げて、これらの人々が帰国後にどう変節したかを明らかにしている。上野は奨学金を得てアメリカに留学した日本の男性知識人の多くが帰国後に反米的になり、日本回帰していくパターンを抽出しているが、上野がこれを「試論」と位置づけていることからわかるように、各人の思想的変節について詳細な分析がなされているわけではない。また、「日本回帰」しなかった人物についての言及も不十分である。他に類似の研究としては、阿川尚之『アメリカが見つかりましたか-戦後編』<sup>ii</sup>がある。阿川は同書のなかでアメリカ滞在経験を持つ16人の日本人を取り上げ、各人のアメリカ体験を辿っているが、対象が膨大で年代も明治から昭和までと広いため、極めて限定的な議論しか提供できていない。本研究では対象をほぼ同時期に奨学金を得て留学した小田実と江藤淳に限定し、彼らのアメリカ体験のみならず、帰国後の思想変遷、ナショナリズムの発露の仕方の違いなどにまで踏み込み、各人のアメリカを巡る苦悩を取り出すことを目指す。天皇制の否定と非武装中立を唱えた小田と、天皇制擁護と自主憲法制定を訴えた江藤の思想には隔たりがあるが、日本の「主体性」を回復したいという欲求は共通している。二人のアメリカとの闘いを振り返ることは、現在まで続くアンビヴァレントな日本人のアメリカ観の原点を明らかにするだろう。

## 本論

### 1章：小田実

1958年、フルブライト留学生としてハーバード大学に留学した小田実は、帰国後、代々木ゼミナールで英語教師をする傍ら、戦後日本を代表する批評家、市民運動家の一人として精力的に活動した。一貫して「権力」から距離をとり、常に「民衆」の側から発言し続けた小田の立場は独特である。彼は天皇制を否定し、日本の近代化の歴史を近隣諸国の抑圧の歴史としてとらえる点において左派的であるが、それは共産党を初めとする革新政党への同調や、マルクス主義への傾倒とは全く結びついておらず、むしろ革新勢力の教条主義的な態度やエリート主義には嫌悪感を露にしていた。また、安保闘争に共感し、ベトナム反戦運動を主導する一方で、「行動」を偏重する学生運動には批判的だった。そしてアメリカ政府やそれに追従する日本政府を批判する一方で、他の多くの

左派知識人のように、社会主義諸国や第三世界の新興独立国を理想化することもなかった。どこにも「足場」を置くことなく、ただ自由な「個人」と、その集合である「市民」のみを信じる小田の思想は、どのようにして形成されたのだろうか。本章では、小田実の思想を紐解くことによって、一人の元「皇国少年」がいかにして反戦平和運動の旗手となり、アメリカを超克しようと思ったのかを明らかにしたい。

### 1-1、戦争の記憶

小田は 1932 年に大阪で産まれた。前年には満州事変があり、32 年は「満州国」成立の年でもあった。小田の父親は大正デモクラシーの時代に京都大学を卒業した弁護士で、自由主義的な考えの持ち主であった。父親は日本が敗れると言い続け、「国民服」を嫌い、背広と和服のみで通したという。<sup>iii</sup>そんな父親に対して、当時の学校教育を当たり前のもので育った小田は反発することもあった。「私と天皇」と題する回想のなかで、小田は父との齟齬について次のように述べている。

「それより（筆者注：玉音放送のこと）数ヶ月前、私は父と争ったことがあった。なんで争ったかは記憶していない。ただ、私は父に問いつめられて、あげくのはて絶叫し、苦しまぎれにこう叫んだのだった。「なんや、こんなものかて、お父ちゃんのもんやあらへん、天皇陛下のもんや。」…（中略）…父は絶句し、黙ってしまったのである。横から母が私に加勢するように、「そやそや、この子の言う通りや、家もものも日本人のものはみんな天皇陛下のもんや」と父に言った。父は黙ったきりであった。」<sup>iv</sup>

そんな無邪気な少国民だった小田の思想は、空襲体験と敗戦を期に変わり始める。小田は 88 年にワシントンで行われたシンポジウムでの演説<sup>v</sup>のなかで、空襲のあと防空壕から出たあと、米軍機から撒かれたビラに「戦争はすでにおわりました」、「あなたの政府は降伏を申し出ました」と書いてあることに衝撃を受ける。翌日に戦争は終わるが、このことは彼に日本政府への不信感を植え付けた。戦後この謎について調べた小田は、この奇妙なタイムラグが「日本が天皇制存続が明確に保証されるのをひたすら待ち、時間を空費した」ためだったことを知る。小田が住んでいた大阪が 8 月 14 日に受けた空襲は、日本から正式な降伏を引き出すために、しびれを切らしたアメリカが一旦は中止した空襲

を再開したものだ。この経験は、天皇制の否定へと繋がっていく。小田は玉音放送を聞いたときの心情について、同じ演説のなかで以下のように述べている。

「かれらは混沌のなかで死んだ。約二十時間後、天皇は玉音放送で厳粛にまた平板に、かれの国が降伏したことを告げた。私自身がかれの声をきいた。私は泣かなかった。」

この経験を原点として、戦後の小田の思想は構築されていく。天皇が臣民を護ろうとしなかったことは、小田の天皇への尊敬の念を粉々に打ち砕いた。それに加えて、周囲の大人達の「転向」も小田にショックを与えた。彼は当時を回想して、こう言っている。

「敗戦は「公状況」そのものを無意味にし、「大東亜共栄圏の理想」も「天皇陛下のために」も、一日にしてわらうべきものとなった。私は、中学一年生という精神形成期のはじめにあたって、ほとんどすべての価値の百八十度転回を経験したのである。「鬼畜米英！」と声高に叫んだ教師がわずか時日ののちには「民主主義の使徒アメリカ」、イギリス紳士のすばらしさについて語った。その経験は、私に「疑う」ことを教えた。すべてのものごとについて、たとえどのような権威をもった存在であろうと、そこに根本的懐疑をもつこと、その経験は私にそれをいまも強いる。」<sup>vi</sup>

そしてこの懐疑は、すぐにアメリカにも向けられることになる。小田はGHQがゼネスト禁止命令を出した時の心情を、こう回想している。

「…初老の国語の教師で、ストライキなどできるはずがない、秩序を重んじるアメリカが禁止するのにきまっていると、私たちに説く人がいた。私も幼き共産主義者たちとともに、その教師のことは、きわめてシニカルに私たちの耳にひびいたことばを信じなかった。私たちにとって、アメリカは進歩を重んじるアメリカであって、腐った秩序を重んじるアメリカではなかったのである。それゆえに、アメリカ占領軍がゼネ・スト禁止の命令を出したとき、私は自分のアメリカへの信頼が一瞬にして崩れ去ったように感じた。というよりは、アメリカに裏切られたという感じをもったと言ったほうがいいかもしれない。それまで私たち若者の味方だったアメリカが、一瞬にして、その国語の教師たち老人の味方になった—そうした感じだった。」<sup>vii</sup>

新たな支配者となったアメリカに幻滅しながらも、小田は1958年にフルブライト留学生としてハーバード大学に留学—実際には大学にはほとんど行かず、ニューヨークのハーレムでの「人びと留学」だったとしている<sup>viii</sup>—する。広い世界に出てみたいという渴望は、後述する江藤淳にもあった。多感な時期に価値の転換と、慣れ親しんだ風景が廃墟となることを経験した少年が外の世界に出たいと思うのは、自然なことだったのかもしれない。小田は渡米後に世界各地を放浪するが、「アメリカ」は数ある訪問地になかでも極めて大きな比重を占めている。彼は同時代の若者に多大な影響を与えた主著「何でも見てやろう」のなかで、アメリカ留学を決めた理由は次のように述べている。

「二十世紀のわれわれの文明が、われわれの手に負えないほどに巨大な、ばかでかいものになっている。あるいは、そうなりつつあるなら、そのばかでかさというものに、ひとつ直面したい。そいつが重圧となって私の頭上におおいかぶさってくるなら、その下で自分を試したい、言葉を変えていえば、自分の存在を確かめたい」<sup>ix</sup>

だが、貧しい大学院生であった小田には資金がなかった。そんな彼にとって、アメリカ政府が募集し、旅費を含めた全費用をアメリカ政府が負担するフルブライト留学生は魅力的な選択肢だった。そのような援助が無い限り、当時アメリカに行く事はほとんど不可能だったからである。だが、試験に合格し渡米した小田がアメリカで見たものは、人種差別と「正義なき戦争」であったベトナム戦争だった。それは、敗戦を機に転向した教師たちから聞かされたアメリカとはほど遠いものだった。次節では、彼のアメリカ体験の中身について考えたい。

## 1-2、アメリカ留学と「南部」体験

1958年のアメリカ南部では、人種差別は合法であり、黒人と白人はあらゆる場所で分けられていた。日本人は有色人種でありながら「白人用」の施設を使う事になっていたが、北部では隔離政策が廃止されていたため、小田は「部外者」であり得た。小田は当初ニューヨークで過ごした後、「南部」へと向かうが、そこでの経験は後に彼に南部を舞台にした小説「アメリカ」を書かせるほど強烈なものだった。彼はミズーリ州の片田舎で見た光景について、こう書いている。

「ガラス窓があり、それごしに、向こうの別世界、「黒人用」待合室が見えた。うす暗く狭く汚い。そして、こちらの世界にはわずか五六人の客しかいないのに、それよりもはるかに小さい別世界は、人間-黒い色を持った人間でみちていた。ベンチに坐れずに立っている人もいる。その人は、こちらのコジキのような白人よりも、はるかにゆたかに見えた。しかし、彼は「あちら側」にいる。」<sup>x</sup>

「自由」と「民主主義」を国是とするアメリカの現実。小田は「白人用」待合室から「黒人用」のそれを眺めながら、「いきどおり」を覚えると同時に、「見下げはてたヒキョウないやったらしい気持」を感じる。それは不快であると同時に、ある種の「快感」をも含んでいた。小田のように人種問題に直面してアメリカに幻滅するというパターンは、過去にもあった。例えば1884年にキリスト教を学ぶため渡米した内村鑑三は、キリスト教の「聖地」であるはずのアメリカで人種差別や過度の金銭崇拝が行われていることについて、激しい怒りを示していた。

これが我々が宣教師によって基督教の他宗教に対する優越性の証拠として受け取るように教えられた文明であるか。ヨーロッパとアメリカをつくった宗教はたしかに至高所からの宗教であったに相異なるということ、何たる恥かし気な様子で彼らは我々に公言したことか。もしも今日のいわゆる基督教国をつくったものが基督教ならば、天の永遠の呪いをしてその上にとどまらしめよ！平和は我々が基督教国にて見出し得る最後のものである。混乱である、複雑である、精神病院である、刑務所である、救貧院である！」<sup>xi</sup>

小田は内村と異なり、キリスト教の神髄を学びに行ったわけではない。だがアメリカに対して抱いていた理想が打ち砕かれたあとに、アメリカを信じられなくなったという点では共通している。そしてアメリカの現実を知った上でも、敢えてアメリカ的理念を掲げ、現実のアメリカを超克するというスタンスも2人を結びつけている。内村も小田も、権威や伝統によってではなく、自分で物事の是非を判断する「個人」という概念-それは伝統的な日本社会には存在しない、近代的観念であった-を日本社会に根付かせ、それによってアメリカをも乗り越えようとした。その意味において、彼等は「親米」であった。

### 1-3、帰国後の言論活動：新たな原理の模索

帰国後の小田は、戦後民主主義を擁護する旗手として、活発な言論活動を行うようになる。彼の言論の内容はベトナム反戦平和、小国主義、そして自律した「市民」という概念の提唱に要約できる。そしてこれらは、彼なりの「ナショナリズム」の発露でもあった。小田の市民運動はすべて国際主義的であるが、自由な個人の「主体性」を重視する点で、個人が所属する国家の主体性も問題とされなければならない。事実、小田はベトナム反戦運動において、日本政府の主体性のなさを批判していく。その苛立ちは、ベトナム戦争だけではなく、以下のような「小さな」ことにも現れている。

「一画があり、そこには白いペンキぬりの家、ミドリの芝生、ひるがえる星条旗が見えた。ふしぎなことに、日本へ帰ってきたという実感が起こってきた。その一画の名前を忘れていた私は運転手に、あれは「原宿キャンプ」というのかね、と訪ねた。「ちがいますよ」運転手はさらりと何気ない口調で答えた。「ワシントン・ハイツ」です」私はそのことばによほど腹を立てたのにちがいない。私は何の罪もない運転手にくっついてかかっていた。どうして連中は「原宿」とか「代々木」とかいう地名を使わないんだ。占領時代が過ぎてから、もう何年になる。運転手は、突然どなり出した私にたまげたらしい。

「仕方ありませんよ。昔からそう言っているんですから」<sup>xii</sup>

このやりとりは、小田のナショナリズムの性格を表している。彼は日本の「伝統」や歴史を絶対視し、賞賛することはしない。だが、自らの、そして自らの所属する国家の「主体性」には敏感なナショナリストでもあった。占領統治が終わったにも関わらず「ワシントン・ハイツ」という名前を平然と使用するアメリカへの怒りと、そしてそれを許している日本への二重の怒りが見て取れる。小田のナショナリズムの主体は「自立する市民」である。「自立した市民」によって担われ、「理念」に基づくナショナリズムは、正にアメリカのそれであった。小田は、自由、民主主義、平等という理念を受け入れさえすればそれは「建前」でもあるのだが-出自が何であろうと「アメリカ人」になれるという、ゲゼルシャフト的社会をベースとするナショナリズムを日本社会に移植しようとした。志を同じくする各国市民が連帯するそれは、アメリカを「超克」するための唯一の方法ではなかったか。

小田は数々の評論、エッセイを残しているが、彼を他の知識人から隔てる特



徴はその「行動力」にある。そして「行動」を起こすにあたって、いかなる団体の指示も受けず、自由な個人が主体的に行動を起こすことを重視する点で、アメリカ滞在中に参加した公民権運動の影響を強く受けていた。小田の市民運動は人種差別や女性差別反対の運動に影響力を持っていた「ニュー・レフト」と呼ばれる若者たちの思想をベースにしており、それは「国家」の民主主義に対する「人民」の民主主義の重視という形で、彼の通奏低音となっていた。

### 1-3-1、ベトナム反戦運動：「ベ平連」の試み

小田は帰国後、ベトナム戦争を契機として一気に戦後の言論をリードする存在となってゆく。小田は東京大学文学部を卒業し、ハーバード大学留学という典型的な知的エリートであったが、アカデミズムからも革新政党からも距離を置いた。そしてこうした傾向はアメリカの「ニュー・レフト」たちとの交流を通して身に付けたものである。

小田は彼らの手法を使って日本に「市民運動」を移植することに注力する。それは単なる反体制運動ではなく、「民衆の手に政治を取りもどす」<sup>xiii</sup>運動であった。小田が意識的に用いるようになる「市民」という言葉は、後にベ平連に参加することになる哲学者の鶴見俊輔によれば、元来は明治以降の行政用語として使われていたが、同時に「日本に残っている封建制の名残と対比される理想状態として日本の知識人に使われるように」<sup>xiv</sup>なった言葉である。このような意味で「市民」という言葉を用いた知識人の代表例として、丸山眞男が挙げられる。彼は1948年に発表した「日本人の政治意識」<sup>xv</sup>と題する論考で、ヨーロッパ社会では物事の善悪を個人が主体的に判断するのが社会通念になっているが、日本社会には「権威信仰」が根を張っており、「人間の行動の場合の価値の基準が権力から独立して存在し得」ないと指摘している。つまり日本には未だ近代的「市民」が存在しないから、「民衆」ないし「大衆」を「市民」にすべく知識人が啓蒙しなければならないということである。こうした考えは、戦後の知識人たちの間では広く共有されていた。小田自身は丸山の「大衆」の主体性を軽視し、ややエリート主義的な「市民」理解とは距離をおいているが、基本的な理解では一致している。小田自身の定義では「市民」とは<sup>xvi</sup>、

- (1) 自分のことは自分で決める。
- (2) 「身にしみる」ことに

### (3) 「身銭をきる。」

人のことであり、重視されているのは自発性、主体性である。したがって、小田は当時の労働組合や前衛政党、前衛組織を批判した。こうした組織は見かけこそ「前衛的」でありながら、小田の目には「市民」の理解において極めて「静的」、「保守的」、「反動的」に見えた<sup>xvii</sup>からである。小田はベトナム戦争当時の政治的な集会で組合や前衛政党が盛んに使っていた「市民」という言葉について、次のように述べている。

「私をウンザリさせるのは、「労、学、市民の連帯」というようなことばに、「市民」とは労働者とか学生とかによって指導される存在であるという考え方がチラチラするからである。」

アメリカから持ち帰ったこの「市民」概念を使って小田はベトナム反戦運動を展開していくが、その理由を彼は次のように述べている。

「これまで信頼してきた「アメリカ」がなぜこのように愚かで正当化できないことをしているのかという一行に、民衆のこの戦争にたいする一般的反応を要約できた。「アメリカ」はまちがいなく戦後の日本社会で、反米感情が突如ふき出したり左翼陣営にかなり強い反米姿勢があったにもかかわらず、もっとも人気のある外国だった。しかし戦後史上はじめて、人びとはかれらがそれまでどちらかといえば素朴に信頼し信じていた「アメリカ」に疑問をもちはじめた。この「アメリカ」とは、単に国民や国家あるいは軍事大国ではなく、それ以上のもの、すなわち、民主主義や自由といった原理や大義だった。」<sup>xviii</sup>

小田はベトナム戦争を戦うアメリカに対して「アメリカよ、独立戦争当時のアメリカにたちかえれ。あの素朴な民主主義、民族自決の精神にたちかえれ」<sup>xix</sup>と訴える。彼はそのようなアメリカが実際に存在したのかどうかは問題にしない。それはただ「観念」の世界にのみ存在する「アメリカ」である。アメリカが立ち返るべき「原点」を設定することなしに、「現実」のアメリカを批判することはできなかつたのではないだろうか。

小田のベトナム反戦運動は、自身がアメリカで参加した人種差別撤廃運動と

同じように、政党や団体からのバックアップを受けないきわめて「緩い」組織体であった。小田は運動のスローガンとして「ベトナムに平和を」、「ベトナムはベトナム人の手に」、「日本政府はアメリカに協力するな」を挙げ（後に「安保をつぶせ」、「沖縄を私たちの手に」が加えられた）<sup>xx</sup>、他には綱領や規約をつくらなかった。これらの「理念」に共鳴する個人ならばだれでも参加できるという「ベ平連」の運動は、日本の市民運動を変え、それに参加する人々の意識も変えた。例えば以下のような意識は、新しいものだった。

「巡查がやって来て、私のそばにいた人に何やらいちゃもんをつけ、あげくのはて、「あんたは何だ」といばった口調で言うと、すぐさま、その人は答え直した。その答え直し方がいかにもあざやかな、まるでカチリと音のするようなはね返し方だったので私はまだよくおぼえているのだが、彼はべつに声もあらだてないままで、「おれか…おれは市民だよ」と言ったのである。」<sup>xxi</sup>

アメリカのニュー・レフトから受け取った市民運動によってアメリカ政府を批判するというこの運動は、宗主国に留学した植民地人が、その理念を利用して宗主国を批判するという植民地人ナショナリズムを彷彿とさせる。小田の反戦運動は、彼が民主主義の原理として重視しているリンカーンの言葉「人民の、人民による、人民のための政治」を実践しようという試み<sup>xxii</sup>だった。小田が盛んに提唱する「国家民主主義」に対する「「人民の」民主主義」とは、「旧き良き」アメリカン・デモクラシーの復権に他ならなかった。

### 1-3-2、「護憲」ナショナリズム

先に小田がアメリカの立ち返るべき原点として、独立戦争の時期を挙げていることを述べたが、小田は日本についても、立ち返るべき原点を設定している。それは日本国憲法の理念であった。そして小田は新憲法を新たなナショナル・アイデンティティとして称揚していく。小田の新憲法に対する評価は、極めて高かった。

「私たちが戦後「平和憲法」を自らの生きる原理として選び、非武装、戦争の放棄の道をとろうと決意したのは、その強者の「平和」のおぞましさとともに破綻の根本的反省の上に立ってのことだ。ただ、その理想をいかに実現するのか。それは変革と反戦を車の両輪とする弱者の「反戦」を通してしかない—この透徹した見通しを、強者の位置か

ら、弱者、弱者中の弱者の位置に転落した当時の日本は、憲法の基本原理を述べた「前文」を読むと、持っていたように思える。」<sup>xxiii</sup>

平和を国是とする新憲法の評価の背景には、小田の空襲体験が影響している。圧倒的な恐怖と破壊に苦しんだ小田にとっては、従軍こそしなかったものの、戦争は「観念」ではなくて生々しい「経験」だった。空襲の恐怖に比べれば憲法が誰によってつくられたか、またはどのようにして制定されたのかなどは些末なことに過ぎなかった。小田は憲法が日本人自身によって獲得されたものではないということは全く問題としない。なぜなら、小田にとっては新憲法が江藤淳や三島由紀夫が主張するように「押しつけ」だったにしろ、新憲法の理念が日本の「民衆」の心情と合致していたという事実の方が大切だったからである。彼は敗戦がもたらした状況と「押しつけ」られた新憲法について、次のように言う。

「…ただ、ここで強制と言っても、暗い、陰惨なそれではなかった。「強制による解放」と言った感じであっても、そのことばの力点は、むしろ「解放」にあった。強制があったとしても、それはそうした強制であった。（この点から、憲法をめぐる論議の中で、それが「押しつけ」であるかどうかという議論ほど、無意味なものはない。「押しつけ」であったとしても、国民はそのときそれをそんなふう感じていなかった。けっして強制によってそう感じていなかったのでもなく、またたんなる無知によってそうなっていたのでもない）。」<sup>xxiv</sup>

平和憲法の肯定は、小田にとっては必然でもあった。小田の言説のなかでは、アメリカにはリンカーンや独立戦争といった原点が与えられているが、日本にそれらに相当するものは与えられていない。小田は同じ論考のなかで「日本軍国主義」という言葉を使うと問題の幅が狭められると述べ、自らが向き合うべき過去の原点を明治維新に設定する。明治維新は大日本帝国の膨張と軌を一にしているため、アメリカ独立戦争のような立ち返るべき原点にはなりようがないのである。このような認識から出立すれば、必然的に戦後の平和憲法が唯一のよりどころとならざるを得ない。この平和憲法も、アメリカからの下賜品であり、日本人が主体的に選び取ったものではない。それでも小田はこの憲法の機能的側面を重視し、新しいナショナル・アイデンティティとするのである。

小田によれば、日本国憲法は「戦争放棄」という項目があり、徴兵制がないという点で、十分に世界に誇れるものだった。小田は「何でも見てやろう」のなかで、外国人相手に「お国自慢」をする際に、戦後日本が「小国」であり、他国に対して悪をなしていないことと、徴兵制がないことを引き合いに出している。

「そして、われわれが徴兵制をもたないこと、これもまた、うれしいことであり、誇りに思えることであった。どこかのユース・ホステルでも必ず誰かがこのことについて訊ね、私がかぶりをふりながら、われわれはそんな愚劣で野蛮な制度はもうとっくの昔にかなぐり捨てたのだと言うとき、まわりにいるさまざまな国籍の若者の目が輝いてくる。そのはずであった。すでに西ドイツでさえその制度を持つにいたった今、私が出会った多くの若者たちのなかで、徴兵制を持たない国に所属する者は、ほとんどなかった、いや、皆無だった。私はこのことを大切にしたい、大切に護り抜きたいと思う。」<sup>xxv</sup>

小田は日本を「他をおびやかす軍事大国としてではなく、今度は平和を愛する小国として世界に再登場した」国であるとしている。だからこそ、アメリカは二重の意味で批判されなければならなかった。第一に、民族自決のために宗主国と戦った自らの原点を忘れるなという意味において。第二に、ようやく平和国家として歩みだした日本を再び戦争に関わらせようとしている点において。小田は警察予備隊の創設、レッド・ページといったアメリカからの「逆コース」への抵抗として、日本の知識人が親米から親ソに振れたことを西洋の「理想化」、ないし「理想の先取り」だと批判的に論じた。小田にとっては、アメリカが「帝国主義の権化」になったからといって自動的に社会主義諸国を「平和勢力」に仕立て上げるのはあまりにも単純に過ぎた。小田は「帝国主義の権化」となり果てたアメリカが忘れていた理念によって、無批判な「親米」、「親ソ」を超克しようとした。

また、アメリカが日本に「押し付けた」自らの「果たせなかった夢」である憲法を盾にアメリカに反省を迫る小田のスタンスには、アメリカが理想の国であってほしいという願いも含まれている。「自立した市民」を軸にした反戦平和活動は国境を越え、アメリカでも少なくない賛同者を見出し、1966年には「日米反戦平和条約」<sup>xxvi</sup>への署名が実現した。実際にこうした行動が直接アメリカの行動を変えることはなかったが、戦後一貫して「市民」と「人民の」民主主

義を提唱しつづけた小田の言論は、最も「反米的」であると同時に「親米的」であったと言える。

## 2章、江藤淳

1962年、文芸評論家の江藤淳はロックフェラー財団研究員としてプリンストン大学へ留学し、現地で一年間日本文学を講じた後帰国し、「戦後民主主義」批判の旗手として戦後の言論をリードした。1933年生まれで敗戦時に12歳だった江藤は小田と同年代にあたるが、その戦争観、アメリカ観は対照的である。まず江藤は戦争が始まる前に鎌倉に疎開しており、終戦まで鎌倉に居続けた<sup>xxvii</sup>ため、実際に空襲を受けた経験がない。そして日露戦争時に海軍で大佐を務めた祖父<sup>xxviii</sup>と三井銀行行員の父を持ち、当時高級住宅街であった新宿、大久保百人町の一軒家で育ったブルジョワ階級の出である江藤にとって、戦後とは「平和」でも「民主主義」でもなく、父のボストンバッグと衣類がコソ泥に盗まれること<sup>xxix</sup>であり、自分と自分の家族が下の階級に転落したということへの喪失感<sup>xxx</sup>だった。そこには小田のような天皇への不信も、戦争はもうこりごりだという感情もない。小田とは対照的に大日本帝国の膨張と軌を一にして栄えたブルジョワの家系—帝国軍人の祖父と財閥系銀行の父というのは象徴的である—に産まれ、「明治」を賞賛して「戦後」を否定し、後にアメリカとの決別に至る江藤の思想は、どのようにして形成されたのだろうか。

### 2-1、「戦後」への幻滅

江藤は戦後に感じた喪失感について、次のように述べている。

「被害は少なかったが、このとき私が奪われたものはいくらかの金と父のゴルフ鞆と衣類だけではない。私はいわば敗戦が自分のうちぶところに土足で踏みこみ、そこから誇りを奪って行ったのを感じた。私の喪失感は深く、悲しみが限りなく湧いてきたが、だからといってコソ泥と闇屋と彼らの背後の退廃に負けているのはいやだった。社会は大きくまわっていて、その遠心力で中心の近くにいたものが端に弾き飛ばされ、端にいたものが中心にのし上がろうとしている。」<sup>xxxi</sup>

そしてこの喪失感は、戦後知識人への怒りに変わってゆく。

「父は戦争中ファナティックになれなかった一国民として生きてだけで、なにも利得を食ったわけではない。彼が混乱した時代に生きにくい人間であることは否定できないが、こういう父が戦後なにもも得ず、すべてを失いつづけねばならぬことは不当と思われた。そして「思想」を売って生活している文学者や大学教授が、高級な言葉で「良心」を論じながら繁昌しているのは不思議であった。」<sup>xxxii</sup>

ブルジョワ階級から転落したという事実を重視する江藤にとっては、戦後の日本を支配している思想は「物質的幸福の追求」であり、「平和」でも「民主主義」でもなかった。<sup>xxxiii</sup>だが、こうした感情はただ単に自らが没落したということからくるルサンチマンではない。旧制中学時代に夏恵漱石、志賀直哉、芥川竜之介、菊池寛といった文豪の名作を読みふけり<sup>xxxiv</sup>、後に『夏目漱石』で華々しく文壇デビューを果たし、プリンストンでは学部で「古典日本文学」<sup>xxxv</sup>を担当し、大学院ゼミでは森鷗外、永井荷風、正宗白鳥といった近代日本の文豪の傑作を読ませよう<sup>xxxvi</sup>とする江藤にとっては、「戦後」の文壇はおよそ無価値なものに見えたのである。江藤は戦後の文学、文化の貧困について以下のように言っている。

「そしていったい文学とはなんだろうか、それは私情を率直に語ることにはじまるものか、それともそれを偽って「正義」につくことだろうか。九十九人が「戦後」を謳歌しても、私にあの悲しみが深くそれがもっとも強烈な現実である以上私はそれを語る以外にない。人は「平和」を、「民主主義」をいくらでも語ればよい。もしそれが彼にとって信じ得る唯一の現実ならば。人はかつて圧迫された悲しみを、かつて拷問された屈辱を、「ざまあみろ、いい君だ」ということを、戦争中の恐怖を、敗戦後の開放感をいくらでも語ればよい。ただ私は人がそうすることによって得たものを忘れずにいてほしいと思うだけだ。つまりこのように語ることは戦後の日本で「正義」とされ、「正義」を語るものは物質的幸福か道徳的満足によって報われているという簡明な事実を忘れてほしくないというだけだ。」<sup>xxxvii</sup>

江藤はさらに続けていう。

「戦後「正義」を語って来た人々のつくりあげた文化が、いまだにひとりの鷗外、ひとりの漱石を産み得る品位を得ていないということを直視するようにすすめたい。」<sup>xxxviii</sup>

そして貧弱な文化しか生み出さない戦後日本を創ったアメリカにも、江藤の怒りは向けられていくことになる。江藤は帰国後にアメリカ占領下に行われた検閲や新憲法の制定過程を問題視し、アメリカの欺瞞を執拗に追求していく「反米」の旗手になっていくが、その背景には新たな「国体」となったアメリカの「民主主義」や「平和」が日本の言論の質を下げたという意識も関係しているように見える。さらには江藤の祖父が海軍大佐だったということも関係している。江藤にとって「軍」は非難されるべき暴力装置ではなく、親しみを覚える対象であり、優秀だった自分の祖父のことであった。江藤は小田が戦後を「再生」の時代と認識したのと対照的に、戦後を「喪失」の時代としてとらえている。

「しかし敗戦によって私が得たものは、性格時自然が私にあたえたものだけにすぎない。私はやはり大きなものが自分から失われて行くのを感じていた。それはもちろん祖父たちがつくった国家であり、その力の象徴だった海軍である。私は第二次大戦中の海軍士官の腐敗と醜状を自分の目で見る機会があったから、この海軍が祖父の時代の海軍と同じものではないらしいことに漠然と気がついてはいたが、それでも連合艦隊が消滅したことは心に空洞をあけた。」<sup>xxxix</sup>

このような認識に立つ江藤は、必然的にアメリカとは対決せざるを得なかったと言える。江藤は決していわゆる国粹主義者ではなかったが、アメリカには複雑な感情を抱いていた。江藤は実際家の父の指南で戦中から英語を学ぶことを勧められ、義理の祖父から個人教授を受けていたが、彼が義理の祖父とのレッスンで使っていたのは古いイギリス式英語のテキストであり、アメリカのそれではなかった<sup>xl</sup>。これは明治以来日本ではイギリス式の英語がスタンダードだったからであり、「米語」のテキストが存在しなかったからに過ぎないが、江藤にとっては重要なことだった。同じ英語でも、「イギリスの英語をやっている限り占領されていることを忘れていられる」<sup>xli</sup>イギリス英語は救いだったのであり、「アメリカ人と直接接触して、英語を習うということは私は絶対にいやだった」<sup>xlii</sup>のである。そして東京生まれである江藤はいくらでも「アメリカ的なもの」に接する機会があったにもかかわらず、彼はアメリカ映画やアメリカ音楽、英語放送、アメリカ人との接触を避けていた。<sup>xliii</sup>それは「占領時代に決定された勝者と敗者の関係、あるいは楽天的な教師と懐疑的な生徒の関係が、



個人のつきあいのなかにまぎれこむのがいやだったから」<sup>xliv</sup>であった。江藤にとってアメリカとは、何よりもまず「勝者」であり、かつての「敵」であった。

だが、そんな誇り高い少年であった江藤も、高校2年になると外国へ行きたいと思うようになる。理由は家に居るのがいやになったからであった。<sup>xlv</sup>結果的に江藤はアメリカ留学の試験に落ちてしまうが、この経験が元となって進駐軍のラジオ放送を聞き始めたという。<sup>xlvi</sup>江藤にとってはこの試験が初めての「アメリカ」との接触だった。当時外国へ出て行きたいと願う若者にとって、アメリカはほぼ唯一の選択肢だった。1ドルが360円のこの時代、企業や官庁、アメリカの財団や大学からの援助なしに海外渡航をすることは夢物語だったからだ。

## 2-2、アメリカ留学とプリンストンでの生活

1962年、文芸評論家として活動を始めていた江藤は、ロックフェラー財団研究員として、プリンストン大学に籍を置いた。江藤は内村や小田とは異なり、渡米にあたっての「気負い」がない。彼は内村のようにアメリカを人類の理想が体現されている国として理想化なかったし、小田のように自分を試してみたいという野心も持っていなかった。戦後を「喪失」としてとらえる江藤にとっては、その「戦後」をもたらしたアメリカから学ぶことはなかったのである。江藤は極めて冷静に次のように言う。

「私は本質的に彼らの外側において、内側にはいない。彼等が「外人」であるなら、私はまさしく東洋からきた「異教徒」であった。…(中略)…私は、幸か不幸か世界には二つ以上の文明があり、米国人が一つまり西洋人たちが自己の文明と信じるものがそのなかのひとつにすぎないことを知っていたし、それが絶対的優越性を持つかどうかを断定するには、おそらくまだ時期が早すぎると考えてもいた。」<sup>xlvii</sup>

この傍観者的な感覚は、自らニューヨークのハーレムに分け入って、アメリカの内側に入っていくとした小田と対照的である。また内村や小田がショックを受け、人種差別撤廃運動へと傾倒していくのに対して、江藤は人種問題に対してもコミットしていこうとはしない。江藤はミシシッピ大学への黒人学生入学に際して白人の抵抗を除去するために連邦軍が派遣されたミシシッピ事件に触れながら、アメリカの人種問題について以下のように言っている。

「しかし、歴史的にあって、アングロ・サクソン系、ドイツ・北欧系、ケルト系、ラテン・スラヴ系、東洋系の順で、次々に移住して来ては既得権をつくりあげ、あるいは例の適者生存の法則によって、その權益を先住者の手から奪っていった諸人種の集合体である合衆国という移民国家の特殊な成立事情を思えば、人種間に相互排斥の現象が起こるのは、むしろ当然と思われた。」<sup>xlviii</sup>

このような冷静さを保ち得たのは、もちろん江藤が「北部」の大学町に留まり続けたことと多いに関係がある。江藤は小田のように人種別に分けられたトイレや待合所といった場所を訪れなかったし、ハーレムやバーで黒人と接し、会話する事もなかったからだ。もし現実の差別に直面する機会があれば、人種問題への意識も変わっていただろう。そのため彼は政治的に正しくない南部を糾弾し、正義を掲げる北部を支持するといった態度はとらなかった。江藤は人種差別を「人道上明らかに不当」<sup>xlix</sup>とは言うものの、南部の人種差別を単に人種問題とは捉えなかったのである。彼がこの問題から抽出したのは、強まる一方の北部の影響力に対して、自らの生活様式を守ろうと抵抗し続ける南部という図式だった。彼はこうした南部の姿を日本と対比して、以下のように表現している。

「一方、ウェイ・オブ・ライフの問題についていえば、北部からの影響にファナティックに抗しつづけている南部とはちがって、提督ペリーの来航以来、日本人は、欧米列強の圧力に対して独立を保つために、自分の手で自分のウェイ・オブ・ライフを破壊しつづけて来ていた。人はそれを「めざましい近代化」と呼び、ウェイ・オブ・ライフが自在に変えられるという幻想に頼って生きている。こういう悲惨さは、おそらく南部にはなかった。」<sup>1</sup>

そんな江藤アメリカで心を動かされた光景は、皮肉にも彼が郷愁を持っていた戦前の日本の価値と結びついていた。江藤はプリンストンに到着し、学生たちが寮に帰って行くのを見て次のような感慨を漏らしている。

「私は、ふと自分が明治時代に投げかえされたような幻覚を感じた。士族出の、あるいは新しい知的士族たらんとする「書生」たちが、ウェブスターの辞書を前にして、いわば *learnings in the Nation's Service* を想っていたあの時代-つまり、私は、そのと

きほんの一瞬の間ではあったが、周囲に士族の雰囲気とでもいうべきものを感じたのである。が、それは単に、あまりに反士族的なものが充満している東京から来た私が、異質の学園に触れて、自分のなかに眠っていたなにかを喚び覚まされたために感じた幻覚だったかも知れない。幻覚であるにせよ、それは快い体験であった。私は、ここには依然としてあり、戦後の日本からは消え去ってしまったある精神を想った。私は、両の眼に涙がにじみ出て来るのを感じた。」<sup>li</sup>

さらに江藤はアメリカを、何よりも「力」がものをいう社会であることを発見し、それに気付いたとき彼は興奮し、「私の米国に対する視線に、はじめて焦点ができた」<sup>lii</sup>と思う。「士族的」エリート主義とでも言うべき嗜好をもつ彼にとって、力こそが正義となる米国のありようは、むしろ望ましいものだった。

「要するに、合衆国とはひとつの国であった。それは、いわゆる「民主主義」のモデルでもなければ、「資本主義」の悪の権化でもなかった。そして、力の最大限の発揮と、強者の勝利という明快な原則の作用を、いささかも隠そうとしないこの国のありかたは、私にはかならずしも不愉快ではなかった。米国で、力は正義だという思想が支配的だと言うのではない。しかし、この国で「正義」をおこなっているのは、ほかのなんでもよりも、力であった。」<sup>liii</sup>

このように江藤はアメリカに反発を感じながらも惹かれて行くが、次節でみていくように帰国後の江藤の言論から判断すると、彼はアメリカに幻滅し、最終的には「決別」を選んだように見える。アメリカに幻滅したという点では小田も同じだが、彼はあくまでもアメリカに本来の姿に立ち返れと言い、アメリカの理念そのものの普遍性を信じ続けた。だが江藤の場合は、先に引用したように、アメリカの理念の「絶対的優越性」を信じない。それゆえ、先の戦争に対する江藤の理解もマキャベリ的なものとなり、「正義」や「倫理」を持ち出さない。江藤にとっては戦争とは「利害の対立を処理するための稚拙な手段」に過ぎないから、「真珠湾攻撃が倫理的に許すべからざる卑劣な手段だという、今なお米国人のあいだに広く新党している解釈を受け入れることはできなかった」<sup>liiv</sup>のである。

そして江藤は、漱石研究家で日本語を流暢に話すヴィリエルモ助教授との会話を通して、「日本と米国の関係には、なにか本質的に不幸なものがある」<sup>lv</sup>と

感じるようになる。江藤は日米関係改善のためには原爆投下への謝罪をし、沖縄を返還すればよいと言うが、それへのヴィリエルモ氏の答えは、以下のようなものだった。

「原爆を落としたのは、戦争中ですからね。アメリカ兵の生命を助けるためには、仕方がなかったのですよ。それに、沖縄は、アメリカが大きな犠牲をはらってやっととったのですからね。とてもとてもかえせませんねえ。」<sup>lvi</sup>

江藤は次第に、アメリカと距離を置き始める。プリンストンでは学生たちに慕われ、充実した日々を過ごしていたものの、江藤にとってアメリカは一外国以上の存在にはならなかった。江藤は「この国と不幸な恋愛をするくらいなら、親しい友人にとどまっていたい」<sup>lvii</sup>と言ったが、「友人」関係も長くは続かなかった。

### 2-3、帰国後の言論活動：戦後民主主義への苛立ち

帰国後の江藤は「戦後」の批判者として、旺盛な執筆活動を続けていく。その中で「アメリカ」は「戦後」を創った当事者として、ネガティブな意味付けが与えられた。だが、江藤の苛立ちはそのアメリカの言いなりになっている日本にこそ向けられたものでもあった。江藤はひたすら経済成長に邁進する日本の近代化を「片輪な近代化」<sup>lviii</sup>と表現し、嘲笑した。明治の知識人や軍人たちが常に背負っていた「国家」の運命をアメリカに一存し、経済分野に活路を見出す戦後日本の姿は耐え難いものだったのではないだろうか。

また、アメリカ滞在中に自らの生活様式を守ろうと抵抗する南部にシンパシーを感じた江藤にとって、戦後日本とは自らの手で自らを破壊しつつある国家だった。「英語も勉強せず、西洋式の生活もしないで、昔ながらのチョンマゲを結って、カゴに乗って暮らしていれば、あるいは日本人はほんとうは一番しあわせだったのじゃないかという気持ちをどうしてもぬぐい去ることができない」<sup>lix</sup>という江藤にとって、「戦後」とアメリカに共感することはできなかった。江藤は幕末に開国したときと戦後の敗戦による「開国」を対比して、次のように述べている。

「幕末維新のころには、日本は確かに外国の圧力のもとで開国いたしましたけれども、独立を辛うじて維持していました。ですから英語を学ぶについても、今日のことばでい

えば主体的な姿勢で学ぶことができました。つまり日本の独立を守るために、あえて敵の武器をとって戦うという姿勢で勉強できたところがあった。ところが戦後は、いやおうなく英語的な規範を私どもは押しつけられてしまった。」<sup>lx</sup>

そしてその「英語的な規範」とは、「戦後民主主義」であり、日本国憲法だった。日本の主体性を取り戻すという江藤の闘いは、自身の階級防衛意識とも相まって、反「大衆」、反米、反「戦後民主主義」、反「進歩的文化人」という形で表出することになる。江藤は「戦後民主主義」が次第に絶対視され「国体」と化していくことに対して違和感を覚えていた。江藤は1965年の「新しい国体」という論考のなかで、中国の核爆発成功に関する日本メディアの報道が「国民感情の憤激」を伝えることに注力し、軍事上の政策を語ることを拒否していることに触れて、以下のように述べている。

「戦前の日本帝国で、国体の神聖は絶対のものであり、はばかりところなき言論は不可能であったことは、「暗黒時代」を親しく経験した人々のつねに説くところである。しかし、戦後の民主国日本でも、同様にあたらし国体の尊厳は絶対不可侵であり、人はこれにはばかりことなくあり得べき国策を論じ得ない。かつての国体尊重がもたらした現実認識のあやまりを、今日の新しい国体の絶対視が繰り返さなければ幸いである。」<sup>lxi</sup>

この違和感は、大江健三郎、丸山眞男、そして小田実といった戦後知識人の言論にも向けられてく。江藤は大江健三郎の戦後民主主義擁護が、「民主主義的な原則とは無縁なもの」であり、「擬装された陰惨な左翼全体主義以外のなにものでもない」と喝破した<sup>lxii</sup>。そしてこの違和感は憲法へと向けられていった。

### 2-3-1：占領政策批判

小田は日本国憲法を人類の普遍的な理想と合致するものとして賞賛し、「護憲」の旗手として奔走するが、アメリカのお仕着せの「日本国憲法」を日本人自身が尊重するという事実は、江藤には耐え難いことだった。彼は60年代から一貫して新憲法とそれを擁護する「進歩的文化人」らを非難し続けたが、そうした姿勢は90年代に入っても変わらなかった。「”平和憲法”は新興宗教か？」<sup>lxiii</sup>や「「1946年憲法」廃止私案」<sup>lxiv</sup>といった挑発的なタイトルの論考の中で、憲法そのものと憲法に関する議論を支えている精神を徹底的に批判している。

前者の中で江藤は、憲法というものはある政治過程の化石に過ぎず、その時々  
の政治的な力関係が反映されたものでしかないと指摘し、日本国憲法にほとん  
ど宗教的な意味付けがなされている現状に警鐘を鳴らした。アメリカが日本を  
武装解除させるために作ったに過ぎない憲法が人類の理想に合致するものとし  
て崇められていることは彼を苛立たせたのである。同論文の中の「憲法が世俗  
的価値を超越するという解釈が横行しているという意味で、私は、今の憲法は  
帝国憲法よりもずっと危険な憲法だと思わざるを得ない」という主張は、感情  
的なアメリカへの反感というよりは、新憲法に対して問いを発する事をせず、  
ただ無条件に肯定するという日本の多数派の精神に対して向けられたものだっ  
た。

こうした認識は、江藤によれば日本の多数派の精神は日本人が心から望んだ  
結果ではなく、占領軍の巧妙な検閲政策によって功名に創られたものであった。  
江藤はワシントンの国立国会図書館などから発掘した占領期の資料の読解を通  
じて、「自由」を旗印とするアメリカの占領政策の欺瞞性を暴いてゆく。この  
作業を通じて、彼はアメリカと決別することになる。

江藤の帰国後、82年から86年にかけて総合雑誌「諸君！」紙上で発表された  
占領軍による検閲の内実を検証する連載では、占領軍による検閲を「日本を日  
本ではない国、ないしは一地域に変え、日本人を日本人以外の何者かにしよう  
という企てであった」<sup>lxv</sup>と表現している。後に書籍化されるこの連載の中に見ら  
れる江藤の苛立ちは、戦後の言説一般に向けられることになる。彼は「民主主  
義」と「言論、表現の自由」を新しい「国体」として捉えた。戦後の言論状況  
は、江藤にとっては以下のようなものであった。

「もとよりやがてそこに現出するのは、そのなかで”民主主義”、”言論・表現の自由”  
が極度に物神化され、拝跪の対象となる一方、現実の言語空間は逆に「厳格」に拘束さ  
れて不自由化し、無限に閉ざされて行くという不可思議な状況である。」<sup>lxvi</sup>

それは江藤にとっては、「自由がない」という点で、そして新たな理念が批判  
的な検討なしに。盲目的に支持されているという点で、戦前とあまり変わって  
いないと思われたのである。江藤は一連の批判のなかで、占領軍が憲法を起草  
したことへの批判や、検閲制度が存在することそのものへの言及、さらには連  
合国の政策についての一切の批判、戦時中の日本側の行為への擁護といったこ

とすべてを禁止していたことを明らかにし、それらが「古来日本人の心にはぐくまれてきた伝統的な価値の体系の、徹底的な組み替え」<sup>lxvii</sup>であると非難する。そして検閲官には日本人も多く採用されており、高給が支払われていたことを指摘<sup>lxviii</sup>し、ここで培われた自主規制の技術が占領軍撤退後も受け継がれたという。江藤の苛立ちは、やがて教科書問題という「国際的検閲」にも向けられてゆく。これは日本軍の「侵略」という単語を「進出」に置き換えた教科書が、「侵略行為を覆い隠そうとする下心」の現れだとして近隣諸国からの非難を招いた<sup>lxix</sup>ものだが、江藤は以下のように言う。

「いったんこの検閲と宣伝計画の構造が、日本の言論機関と教育体制に定着され、維持されるようになれば、CCDが消滅し、占領が終了したのちになっても、日本人のアイデンティティと歴史への信頼は、いつまでも内部崩壊をつづけ、また同時にいつ何時でも国際的検閲の脅威に曝され得る。それこそまさに昭和五十七年（一九八二）夏の、教科書問題のときにおこった事態であることは、あらためてここで指摘するまでもない。」

lxx

ここに来て江藤は、自国の絶対視へと至る。日本の主体性を回復したいという狂おしいほどの情熱は、占領軍やアメリカ、さらには近隣諸国への敵意に転化された。

### 2-3-2、リアリストの孤独

「実家」としてアメリカを美化することなく直視し、「大衆」を盲目的に信頼し実質的な成果を残せなかった「進歩的文化人」の欺瞞を衝いた江藤の論考の数々は今でもリアリティを持っている。江藤は安全圏で行われ、米兵のように反戦活動によって刑罰を受けることもない小田の「ベ平連」の活動を「ごっこ」だと嘲笑し<sup>lxxi</sup>、「進歩的文化人」たちの言う「平和」や「民主主義」を軽蔑したが、「公的な価値」が尊ばれ、「私権」は公的な価値に従属していたという「明治」を賞賛する江藤もまた「観念」の世界に逃げていたのではなかったか。なぜなら江藤が「つねに日本人としての文化的自覚を失わず、一種強烈な使命感によって生き」、「国のために書いた」とする漱石<sup>lxxii</sup>でさえ皇室の権威をそれほど大きなものとは感じていなかったからである。例えば1912年に行啓能を見に行った漱石が、列席の皇后と皇太子がタバコを吸う場面を見た時に

感じたのは、以下のようなことだったからだ。

「皇后陛下、皇太子殿下喫煙せらる。しかして我らは禁煙成。これは陛下、殿下の方で我ら臣民に対して遠慮ありて然るべし。もし自身喫煙を差支なしと思わば臣民にも同等の自由を許さるべし。何人か煙草を煙管に詰めて奉ったり、火を着けて差上げるは見ても片腹痛き事なり。死人か方輪にあらざれこんな事を人に頼むものあるべからず。煙草に火をつけ、煙管に詰めることが健康の人に取ってどれほどの労苦なりや。かかる愚なる事に人を使う所を臣民の見ている前で憚らずせらるるは見苦しき事なり。直言して止めらるるように取計いたきものなり。宮内省のものにはかほどの事が気が付かぬにや。気が付いてもそれしきの事がいいにくきや。驚くべき沙汰成。」<sup>lxxiii</sup>

ここには、「畏れ」はどこにもない。確かに明治の知識人は「国家」を意識せざるを得なかつただろう。だが、同時に極めて自由な精神の持ち主でもなかつたか。漱石は決して「公的な価値」を絶対視するような人物ではなかつた。江藤のいう「明治」とは、小田のいう「独立戦争期のアメリカ」のような「原点」だったのである。実際には作家リンカーンの唱えた理念を人類普遍の理想だとして信じてきた小田に比べて、アメリカにも日本にも、「市民」にも絶望せざるを得なかつた江藤は、より不幸だったのであるかもしれない。小田の理想は、戦後民主主義の路線とある程度合致していたが、江藤の理想は、戦後の日本の現状からはあまりにもかけ離れていた。夢を見ない「実際家」たる江藤は、正にそれゆえに一層孤独であった。



### 3：終章

小田と江藤の言説は対照的だが、「日本の主体性を回復させたい」という点では一致している。皮肉なのは、敗戦に道徳を持ち出し、人間の理性を信じ、「自立した市民」によって世界を変革していこうという小田が戦後民主主義を「保守」し、敗戦を単なる物量の差によるものとして捉え、価値判断を持ち込むのはナンセンスだといひ、「大衆」を軽蔑する江藤が戦後民主主義の「革新」を唱え続けたということである。我々が無批判に使いがちな「保守」と「革新」という言葉込められた意味合いは、再検討されるべきだろう。普通、江藤は「保守」ないし「右派」、小田は「革新」、「進歩」、または「左派」と形容されることが多いが、そうしたレッテル張りはあまり意味がないということを示すことができた。「ワシントンハイツ」という言葉に激怒する小田は、どうみてもナショナリストである。そして戦後民主主義に「懐疑」を差し挟む江藤は、極めて「左派的」でもあった。

小田実と江藤淳という対照的な2人を取り上げたのには、まず思想の研究としては対照的な考えを持つ2人を扱ったほうが「面白い」のではないかという憶測があったが、それだけではない。筆者はこの2人が共通して持っている「主体性を回復したい」という情熱に惹かれ、そうした願いが政治的な立場を超えて共有されていたことに新鮮な驚きを感じたのである。「民衆」の良心を信じ、現実の政策を変える力は持ち得なかったものの、「独立戦争時のアメリカにたちかえれ」という小田の言説はあまりにもナイーブに見えたが、彼の理想と「自立した市民」の力で国家に抗するという戦略には深く共感せずにはいられなかった。また江藤の言説に潜むエリート意識と過度な戦前、明治の美化には辟易しながらも、「アメリカ」という存在を前にして悩み、自らの原理をもってアメリカに対峙しようとする姿には惹かれるものがあった。戦後民主主義が「国体」となっているという彼の指摘や、米国と社会主義圏との間で揺れる「進歩的文化人」への怒りなどには共感することも多かった。

現在の国際情勢、国内情勢は60年代のそれとは全く異なっているが、それでも米軍基地問題、尖閣諸島問題などが噴出する度に、アメリカという「親分」には逆らえないという事実を突きつけられる。「親米」でも「反米」でもなく、「攘夷」に走るのでも「奴隷」に甘んずるのでもなく、真に米国をパートナーとするためにはどうすればよいのかという答えは、未だに出ていない。最も日米関係が「熱い」時代に苦悩した2人の言説を時々参照しながら、彼等の苦悩

を知ることは、何らかの「解決策」を提示することにはならなし、そもそも「問題」を「解決」するなどということは容易くできることではない。だが、過去の人々の思想を知らなければ、我々が彼等の置かれている立場からどのくらい隔たっているかを図る事ができないし、「問題解決」に踏み出すこともできないだろう。筆者は2人の言説を読み進めながら、日本とアメリカを取り巻く環境が激変しているにもかかわらず、こと「アメリカ」に関してはほとんど変わっていないという事実気が付いた。そして現在まで続く盲目的な米国崇拜も、感情的な自主防衛論や国粹主義も、実際の日米関係の非対称性を変えるにはあまりにも無力だということが分かった。アメリカを超克するためにはどんな思想が必要で、その思想をどのように活かし、制度や法を構築していけば良いのかという戦後日本の通奏低音となってきた問いは、筆者のような若輩者の手に余る難問である。だが小田や江藤の思想に触れることによって、自らの発想を豊かにすることができただけでも研究をした甲斐があったと思う。研究テーマが定まった後も対象をなかなか限定することができず、己の編集能力も分からないままに手探りで進めたため、極めて粗い研究になってしまったが、それも現在の自分の限界を示しているに過ぎない。己の未熟さを常に自覚しつつ、卒業後も様々なテーマで「研究」に励みたいと思う。

## 参考文献一覧

---

### 序論

<sup>1</sup>上野千鶴子『戦後知識人の北米体験』、『戦時下の文学-拡大する戦争空間』所収、インパクト出版会、2000

<sup>2</sup>阿川尚之『アメリカが見つかりましたか—戦後編』、都市出版、1998

### 本論

#### 1章、小田実

iii 小田実『一線を引く』、小田実「批判と夢と参加—市民、文学、世界—」、筑摩書房、1989、6~7頁

iv 小田実『私と天皇』、「小田実評論撰1」、筑摩書房、2000、455~456頁

v 小田実『現代世界と作家—ひとつの事例』、小田実「批判と夢と参加—市民、文学、世界—」、筑摩書房、1989

vi 小田実『「難死」の思想』、小田実「小田実評論撰1」、筑摩書房、2000、7~8頁

vii 小田実『日本の近代化と知識人の変遷』、小田実「小田実評論撰1」、筑摩書房、2000、452~453頁

viii 小田実『「表現を奪われる」「表現を奪う』』、小田実「小田実評論選2」、筑摩書房、2001、420頁

ix 小田実『何でも見てやろう』、講談社文庫、1979、12頁

x 同書、125頁

xi 内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』、岩波文庫、

xii 小田実『アメリカのつくったもう一つの日本』、「小田実評論撰1」、筑摩書房、2000、158頁

xiii 小田実『原理としての民主主義の復権』、「小田実評論選1」、筑摩書房、2000、83頁

xiv 鶴見俊輔『戦後日本の大衆文化史-1945~1980年-』、岩波書店、1984、182頁

xv 丸山眞男『日本人の政治意識』、丸山眞男「戦中と戦後の間」、みすず書房、1976、342~343頁

xvi 小田実『ベトナムの微笑』、小田実「自立する市民」、朝日新聞社、1974、226頁

xvii 同上、225頁

xviii 『現代作家と世界—ひとつの事例』小田実「批判と夢と参加—市民、文学、世界—」、筑摩書房、1989

xix 同書、427頁

xx 小田実『「自己決定権」という原理』、小田実「自立する市民」、1974、73頁

xxi 小田実『ベトナムの微笑』、小田実「自立する市民」、朝日新聞社、1974、224頁

xxii 小田実『原理としての民主主義の復権』、「小田実評論選1」、筑摩書房、2000、78頁

xxiii 小田実『強者の平和・弱者の反戦』、小田実「強者の平和・弱者の反戦」、日本評論社、1987、21~22頁

xxiv 小田実『日本の近代化と知識人の変遷』、小田実「小田実評論撰1」、筑摩書房、2000、451頁

xxv 小田実『何でも見てやろう』、講談社文庫、1979、414頁

---

xxvi 小田実『平和をつくる』、小田実「小田実評論撰1」筑摩書房、2000、257頁

## 2章、江藤淳

xxvii 江藤淳『場所と私』、「文学と私・戦後と私」、新潮文庫、1974、248頁

xxviii 江藤淳『戦後と私』、江藤淳「文学と私・戦後と私」、新潮文庫、1974、217頁

xxix 江藤淳『戦後と私』、「文学と私・戦後と私」、新潮文庫、1974、227頁

xxx 同上、228頁

xxxi 同上

xxxii 同上、229頁

xxxiii 同上、229~230頁

xxxiv 江藤淳『文学と私』、江藤淳「文学と私・戦後と私」、新潮文庫、1974、209頁

xxxv 江藤淳『アメリカと私』、文春文庫、1991、116頁

xxxvi 同上、127頁

xxxvii 江藤淳『戦後と私』、江藤淳「文学と私・戦後と私」、新潮文庫、1974、236~237頁

xxxviii 同上、237頁

xxxix 江藤淳『戦後と私』、江藤淳「文学と私・戦後と私」、新潮文庫、1974、221頁

xl 江藤淳『英語と私』、江藤淳「江藤淳著作集点・続5」、講談社、1973、90~91頁

xli 同上、97頁

xlii 同上

xliii 江藤淳「アメリカと私」、文春文庫、1991、49頁

xliv 同上

xlvi 江藤淳『英語と私』、江藤淳「江藤淳著作集点・続5」、講談社、1973、100頁

xlvi 江藤淳『英語と私』、江藤淳「江藤淳著作集点・続5」、講談社、1973、101~103頁

xlvi 江藤淳『アメリカと私』、文春文庫、1991、47頁

xlvi 同上、67~68頁

xlix 同上、83頁

l 同上、84頁

li 同上、50~51頁

lii 同上、69頁

liii 同上、68~69頁

liv 同上、83頁

lv 同上、96頁

lvi 同上、93頁

lvii 同上、215頁

lviii 同上、216頁

lix 江藤淳『英語と私』、江藤淳「江藤淳著作集点・続5」、講談社、1973、95頁

lx 同上、96頁

lxi 江藤淳『新しい国体』、福田和也編「江藤淳コレクション1」、ちくま学芸文庫、2001、91頁

lxii 江藤淳『文反故と分別ざかり』、江藤淳「落葉の掃き寄せ」、文芸春秋、1981、66頁

lxiii 江藤淳『“平和憲法”は新興宗教か?』、「SAPIO」、1991年3月28日号

lxiv 江藤淳『「1946年憲法」廃止私案』、「SAPIO」、1991年5月9日号

lxv 江藤淳『閉された言語空間：占領軍の検閲と戦後日本』、文春文庫、2009、183頁

- 
- lxvi 江藤淳『閉された言語空間：占領軍の検閲と戦後日本』、文春文庫、2009、152 頁
- lxvii 同上、241 頁
- lxviii 同上、229 頁
- lxix 『朝日新聞』、1982、7/26 朝刊
- lxx 同上、345 頁
- lxxi 江藤淳『ごっこの世界が終わったとき』、福田和也編「江藤淳コレクション1」、ちくま学芸文庫、2001、54~55 頁
- lxxii 江藤淳『明治の一知識人』、福田和也編「江藤淳コレクション1」、ちくま学芸文庫、2001、128 頁
- lxxiii 平山敏夫編『漱石日記』、岩波文庫、1990、189 頁